



桃太郎異聞

鉄板焼太郎採話

桃源郡足輕村

むかしむかし、とある草深い山奥に、爺さんと婆さんが住んでいた。一年に一人か二人、道を間違えた旅人が迷い込むだけの、人里とは縁のない土地だった。こんな不便な田舎を捨てて街に引越そうと、爺さんと婆さんは何度も相談したが、自分たちの家屋敷を捨てがたく、結局引越せないままだった。

というのも、二人の家は誰もがうらやむ豪邸だったからだ。総檜造りの門構えの奥に、畳なら三百畳もあるという母屋があり、離れも二棟、裏の竹藪に沿っては瀟洒な茶室もある。白壁の蔵が五戸前ずらっと壮観に並ぶ他、納屋、農機具小屋、厩と家畜小屋など、大名の別宅でもこれほどではない大屋敷。どこかに引越すにしても、この屋敷が廢屋になるかと思うと心が痛み、それが引越せない理由になっていた。

とはいえ生活は貧しく、蔵の中は空っぽで、これと言った財産があるわけではない。二人は屋敷の門の前に小さな畑と田んぼを作り、やっとどうにか食いつないでいた。

「あしたちが死んだら、結局は廢屋になるよ」

「それまではわしらで家の面倒を見ようじゃないか」

こんな会話を何度交わしたことだろう。

ある日、爺さんは山に柴刈りに、婆さんは川に洗濯に行った。

婆さんが川の手前まで来ると、道端の藪から赤ん坊の泣き声がある。猫でも盛っているんだろうか、と思いつながら藪を覗くと、なにやら張子のような竹籠のようなものが見えた。その中に泣き声の主がいるのだろう。

恐る恐る藪から引き出すと、やはり人間の赤ん坊だ。丸太つって元気に泣いている。婆さんは洗濯物を放り出して、その籠とも張子ともつかぬものを家に持ち帰った。

よく見れば普通の竹籠なのだが周りに紙が貼ってあり、下半分が桃色、上に行くほどかすれて、籠の上では白くなっている。遠目なら桃に見えなくもない。赤ん坊をそっと抱き上げると、籠の底に荷札のような紙が貼り付けてあり、『桃太郎です。よろしく』と書いてあった。

婆さんは、どうしたものかと考えた。あたしの歳で赤ん坊ねえ。周囲に目などないから、まさか私が産んだとは噂にならないだろうが、それにしてもわざわざこんな辺鄙な山の中に捨て子するなんて、どういう理由なのだろう。このあたり一里四方に捨てれば、拾うのはわたしたちに決まっている。とすると、わたしたちに育ててほしくて捨てたのだろうか。一体誰が捨てたのだろう。様々に考えていると、肩越しに爺さんの声がした。

「桃太郎だど？だめだ。捨ててきなさい」

「お爺さん、それはいけませんよ」婆さんは赤ん坊をしっかりと抱き直して爺さんに振り向いた。「人の子ですよ。犬猫だって死ぬとわかっていては捨てられません。まして人の子、わたしたちで育てましょう」

捨てろと言われて、迷っていた心が逆に振れ、是が非でも育てる気になったのだ。

「わしらが育ててやるいわれはない。まして桃の籠に入れ、これ見よがしに育ててほしいと押し付けるような、そんな母親の子を、どうして引き受けねばならんのだ。不愉快だ。育てるならお前一人でやりなさい」

「母親にはのっぴきならない事情があったのでしよう。私たちには察しも付きませんが」

「察しが付かんだと？くそ、忌々しい」爺さんは腹を立てて出かけてしまった。

最初の一ヶ月ほど、爺さんは赤ん坊を煙たく感じていた。こんな赤ん坊、無理してまで育てることはない、

と思ひながらも、少しづつ大きくなるのを見てみると、自然に微笑んでいる自分に気付いた。仕方がない、わしも子育てを手伝おう。そのうち爺さんは、柴刈りにも農作業にも桃太郎をおぶって連れて行くようになり、桃太郎も爺さんになつて、最初にしゃべった言葉は「じーじ」だった。

桃太郎が五歳になると、爺さんは剣道を教え始めた。農民ながら、若いころには道場で師範代を任されていたこともあつて、剣道の指南は大得意だったからだ。桃太郎もみるみる腕を上げ、八つになるかならずで免許皆伝となつた。氣をよくした爺さんは、続いて柔術と馬術、弓道と槍道を桃太郎に教え、桃太郎にも天性の才能があつたのだから、一度教われればすべてを会得した。

婆さんは少し心配した。男に武術は不可欠だが、仮名文字くらいは読めないと困るだろうし、生きて行くには算術も要る。婆さんは自ら手本を書いて桃太郎に文字を教え、古い算盤を出してきて足し算と引き算を教えた。しかし、座っているのが苦手な桃太郎には苦痛だったらしく、机に向かう度に腹痛を起こした。婆さんは、できれば孔孟の素読まで進めたかったらしいが、これは断念するしかなかった。

十二歳をすぎた桃太郎は、一人でかなり遠くまで遊びに行くようになった。裏山で駆け回っているうちは爺さん婆さんも安心していたが、それが川を渡つて向こう岸に出かけるようになると、やはり少々心配になつてきた。あの子は見てはならぬものを見てしまうだろう。いつかは話さなければならぬことだが。

ある夕方、ご飯を炊いていた婆さんに桃太郎が訊いた。

「川の向こうには、どうして人がいないの？ 田んぼや畑の址がいっぱいあるし、屋根と壁が崩れた家もあちこちにある。向こう側の山の下には神社とお寺の壊れたものもあるでしょ。昔は誰かが住んでいたみたいだね」

婆さんは答えて困つて聞こえないふりをした。飯炊きの火加減に専念しながら桃太郎をちらりと見ると、純

真で好奇心いっぱいの子が見返してきた。ついに話さなければならぬ時が来たようだ。

夕飯の後、爺さんは桃太郎に話があるといつて、広い座敷の真ん中に向かい合つて座らせた。

「毎日元気で遊び回っているようだね。男の子はそれでなければいけない。ところで桃太郎、川の向こう側で面白いものを見つけたようだが、何があつたかね？」

「はい、あちこちに家の址がありました。屋根が抜けているのが多くて誰も住んでいませんでした。それから小さな神社とお寺もありました」

「そうか、みつけてしまったのなら本当のことを話そう。そう、お前が生まれる少し前まで、あそこには村があつたのだ。桃源郡の足軽村といつてな、それはもう豊かな村で、村人は五百人もいた。わしは地主で庄屋も兼ねておつた。わかるか？ 村の取りまとめ役だったのだ。川があつて水には不自由せんから、秋にはコメが有り余るほど実り、四季の野菜、果物にも恵まれておつた。それが、たった一晩で壊滅してしまつた」

「壊滅つて、どういふことですか」

「ああ、滅んだのだ。あの晩、鬼が島から百人近い鬼が襲つてきた。赤鬼、青鬼、それはもう獐猛な連中で、手に持った鉄棒で、ありとあらゆるものを打ち壊しおつた。村人は逃げるしかなく、逃げおくれた者たちは食われるか連れて行かれてしまつた。一人残らずな。それ以来、村は無住になつたのだ」

「お爺さんとお婆さんは、どうやって助かつたの？」

「どうにか生き残つた。わしは剣術で鬼と渡り合つたが、なにしろ多勢に無勢、婆さんを連れて山に隠れるのが精一杯だつた。できれば村人を助けに行きたかつたが、とても叶わず、一晩中、山に隠れたおつた。翌日、家に帰つてみると、鬼が米蔵の米を全部盗んで行ったのがわかつた。四戸前にぎゅう詰めに入っていた米を全

部だ。それから宝物蔵に仕舞っていた金銀珊瑚といった財宝も、そっくり持って行かれていた。村人たちがわしの親切へのお札に贈ってくれた宝物だ。もちろん、家の中の金目のものも、すっかりなくなっていたよ。しかし、なによりも悲しかったのは、この家に奉公していた女中や下男が食われてしまったことだ」

爺さんは涙を流し、鼻をかんだ。

「鬼ってひどいことをするんだね。どうしてそんな悪いことするの？」

「鬼だからさ。良い鬼などいない。悪いから鬼なんだ」

「許せない。理由もなく村を襲って、他人のものを泥棒して行くなんて、ぼくには絶対に許せない」

「しかしなあ、仕返しするには相手が強すぎる。人間にはどうにもできない」

「いや、ぼくがやります。必ず村の人たちの仇を打って、村から盗んだものを取り返します」

「それは嬉しいが、お前はまだ子どもだ」

「もう十二歳です。体格は大人ですし武術なら誰にも負けません」

その夜、桃太郎が寝付いた後で、爺さんと婆さんは額を寄せ合って朝まで相談していたらしい。

三匹銘々伝

翌朝、桃太郎が目覚めると、爺さんと婆さんは桃太郎の旅支度を済ませていた。婆さんは道中の弁当にと、大きな握り飯を三十個こしらえ、おやつ用にと百本近いキビダンゴを作った。爺さんは家伝の名刀と槍、弓矢の手入れを終えていた。宝物を持ち帰るための大八車も庭先に置いてあった。

そうか、昨夜言ったことを真に受けられたんだな、と桃太郎はちよつと困った。勢いで言ったのだ。まさか十二歳の子どもが鬼に勝てるはずはないと、聞き流してくれるとばかり思っていた。こうなったらしょうがない、二人には世話になっているし、ここはひとつ真に受けられたのを真に受けよう。どうしてもダメそうなら京の都にでも逐電すればいい。

ご飯を食べ終えると婆さんが着替えるように言った。持って来たのは白地の服で、あっちこちに桃の実のアップリケが沢山縫い付けてある。これではまるで年長組の「もも組さん」ではないか。さすがの桃太郎も、「ちよつとこれは」と躊躇した。すると婆さんは、「下の生地は白だから、何も付けないと死に装束になるよ」とけろりと言い、「早く着替えなさい」と急かすのだった。死に装束より年長組のほうがましかどうか、桃太郎に考える時間はなかった。

次に爺さんが小さめの旗を持って来た。いわゆる旗指物だ。二本あって、一本には「天下無双の桃太郎」、もう一本には「鬼退治なら桃太郎」。これを桃太郎の背中にくり付けた。

山の中の道を行くから知らない人に会う気遣いはないけれど、いかにも恥ずかしい。しかし爺さんと婆さんは大真面目なのだ。桃太郎には断る勇氣はなかった。

最後に爺さんが何気なく言った。「そうそう、十月の最初の満月の晩、鬼たちは大酒を食らって泥酔するのが慣わしだ。退治するならそのときが一番いい。今からちょうど十二日目の夜がそうだ。わかったな？」

「はい、その晩にやっつけます」桃太郎は答えた。十二日目「ちようど」かどうかわからないが。

刀を腰に差し、弓矢を担ぎ、槍を載せた大八車を引いて桃太郎は出発した。自分の珍妙な恰好を想像すると、このときほど村が無人でよかったと思つたことはない。大八車はすぐく重かった。特に坂道の登りでは全力で奮闘してもずる滑ってほんの少ししか進まない。家がまだ見える坂道で、桃太郎はすでに後悔し始めていた。振り向けば爺さんと婆さんが笑顔で手を振っている。桃太郎も作り笑顔で手を振り返した。

ついに桃太郎が視界から消えたとき、爺さんと婆さんは大きな溜息をついた。

「かえって子どもだから、今度はうまく行くかもしれない」と爺さん。

「だめで元々ですよ。十年前の七人の侍のように、支度金を取られなかっただけいいじゃないですか」と婆さんが言った。

この大八車、何度捨ててやろうと思つたことか。引いて歩くのは拷問みたいだ。これさえなければ十倍の速さで進める。帰りに金銀財宝を積んだら、重くて動かなくなるだろう。それでも引つ張って行く意味はあるのだろうか。

ぶつくさ言いながら大八車を引く桃太郎の横に犬が現れた。やせ細つて毛づやが悪く、尻尾は垂れたままだ。

「桃太郎さんですか。大変そうですね。お手伝いできればいいんですがボクには無理です。何かください」

「こら犬。手伝わないけど何かくれて、虫が良すぎないか」

「だって、もう丸三日なにも食べてないんです。三日前に青蛙を食つただけで、あれはまずいですよ」

「だからって、お前に食い物をやる義理はない」

「そんなあ、キビダンゴの匂いがぶんぶんしてるのに。ひとつでいいですよ。たつたひとつ。そしたら付いて行って、できることはお手伝いします」

「できることって、なんにもないんじゃないの？」

「そう冷たいこと言わないで。どうしてもくれないって言うんなら、大八車に轆かれて死んでやる」

犬は車輪の直前に横たわった。

「ばかっ、犬なんか轆きたくない。掃除が大変だ。わかったよ、ひとつやるよ」

仕方なく犬にキビダンゴをやった。ひとつだけと言つたくせに、犬は三串も食べた。

「いやあ、歯が悪くてね。歯槽膿漏なのかな、牙も奥歯も全部抜けちゃいました。柔らかいものしか食べえないんでキビダンゴは助かります。腹減ったらまたください」

約束が違う、と思いつつも、犬の道連れくらいいいでもいいかなと桃太郎は考え、「付いて来ていいよ」と言つてやった。

犬が、どこに何をしに行くのか訊くので、桃太郎は鬼と鬼が島のことを話した。

「そうですね。正義の味方なんだ。村人の弔い合戦か。かつこいな。ボクもお手伝いします。いいえ、あるんですよ手伝えることが。この鼻はまだ生きてます。鬼の臭いを遠くから嗅げるからお役に立てるでしょう。それから喰るならできます。迫力ある喰りが自慢です。それでなんですけど、もしですね、仮にですね、ボクが役に立って金銀財宝を取り戻せたら、いくらか分け前をもらえますか？ いや、ほんの少しでもいいんです。こんな汚い小判、捨てちゃえ、みたいなのがあったらくれますか？」

「まあね、ただ働かさせる気はないから、働いた分だけあげる」

「わあ、嬉しいな。ついに夢が叶う」

犬が語るには、最終目的は京の都で飼い犬になることだという。カネが入ったら栄養あるものを腹いっぱい食って毛づやの良い立派な犬になり、大きな牙の付いた総入れ歯を作って、京の都で良家の飼い犬になるという。

「総入れ歯？犬用のつてあるの？」

「ありますとも。犬用ポリグリップだつてあるんですから。金歯は下品だから、そうだなあ、牙だけ銀かプラチナにします。だからお手伝いのご褒美はくださいね」

それから二三日して、桃太郎が山の中を歩いていると、道の真ん中で腹を出して寝ているサルがいた。何かわめいている。「さあ殺せ、いま殺せ、すぐ殺せ。説教はたくさんだ。オレを認めないなら早いとこ殺せ」と空に向かって怒鳴っていた。

「桃太郎さん、ちょっと危ないですよ。陽気の変わり目だとああいうのも普通ですけど」

「どけと言ったらどくんじゃないか？言ってきてよ」桃太郎は大八車を止めた。

「やです。犬とサルは仲が悪いのに、相手がキ印のサルなんて」

「しょうがない。あそこまで進んでみよう。こっちが無視してればどくかもしれない」

桃太郎は鼻歌を歌い、犬は周りの景色に見とれていふりをしてそのまま進んだ。大八車を近付けてもサルは気付かない。あと一尺ほどで車輪がサルを轢きそうになったとき、サルは急に桃太郎を睨み付けて言った。

「おい、知らん顔で轢き殺す気か。それともチキンレースのつもりか」

「轢き殺したくはないよ。車輪が汚れる。それから、サルと鶏ごっこはしたくない」

「うわっ、馬鹿な人間。チキンレースの意味、わかってないだろ。まあいいや、殺せよ。ひとおもいにザックリと」

サルはまだ腹を出して寝ている。桃太郎と犬は困って見ているだけだ。

「なんだよ、今度はだんまりごっこか。いっそ睨めっこでもしようか。俺が負けたら殺してくれ」

「あのなあ、お前が死にたいなら止めないよ。どっかよそで首くるなり飛び降りるなりしてくれ。僕は関わりたくない」

「こらっ人間、徹底的にわかってないな。俺は殺してくれと言ってるんで死にたいんじゃない」

「同じじゃないか」

「全然違うね。結果が同じなら全部おんなじって思うのは人間の悪い癖だ。俺は結果よりプロセスが大事だつてわかつたんだよ。ちくしょう、わかつちまつたんだ。くそっ、だから殺せ」

「ねえねえ、やつぱ少しヘンですよ」犬が小声で言った。

「やい犬、痩せ犬、ボロ犬。てめえみたいな単細胞はすっこんでろ。ああ、なんていうことなんだ。理解されないまま生きるより、どんな馬鹿にでも殺されたほうがまし。叶わないとわかっている念願をあきらめられないなら、今すぐ殺されてしまいたい」

「なんか、すぐく込み入ってるみたいだね」これは簡単な話ではなさそうだと桃太郎は気付いた。「ねえサルさん、詳しく話してみないか？力になれるとは約束できないけど、聞くだけは聞けるよ。往來の真ん中で吼えるより、いくらかいいんじゃない？」

「えっ、話を聞いてくれるの？」サルは元気に立ち上がって言った。「その前に何か食い物」

サルはキビダンゴを二串半食べた。三串やったものを、食い終わる前に何かに気付いた風で、「さっそく実践しなくちゃ」とか言いながら半串を「食べなよ」と犬に差し出したのだ。犬は不思議に思ったけれど、逆ら

うと怖そうなので、とにかく食べた。

サルが話したのは次のようなことだ。なお、表記の都合上、このサルを「A」としよう。

近くの山に五十四匹ほどのサルの群れが住んでいる。ボスは老年の白髪混じりで、数匹の取り巻きに囲まれて群れを支配している。Aの地位は、メスや子ザルを含めた群れ全体でも下から数えたほうが早い。喧嘩はめっぽう強いのに地位は不当に低い。これはAが決してゴマをすらないからだ。子ザルと遊ぶわけでもなく、メスザルの手助けをするわけでもない。ましてボスと取り巻き連中には挨拶もしなければノミ取りもしなかった。Aには、どうして他のサルとうまく付き合わなければいけないのか、理由がわからないのだ。生まれるも一匹、死ぬも一匹ではないか。他のサルの顔色を見ながら生きるなんてまっぴらだ。

Aはボスになりたかった。サシで喧嘩すれば今のボスなど一瞬で倒せる。実際何度か襲い掛かってみたが、その度に取り巻きに阻止され、寄つてたかつてボコボコにされて群れでの評判はどんどん悪くなった。強いものがボスになる、この当たり前のことがどうして許されないのか。

もつと山奥に幻の長老というサルが住んでいる。なんでも、数代前のボスで、ボスの座がむなしくなつて群れから離れたのだという。Aは山奥に分け入り、自分がボスになれない理由を訊いた。

「良い言葉で言えば協調性、気遣いだ。まあ、そういうのが面倒になつてわしは群れを離れたわけがな。腕力だけでは群れのボスには選ばれん。人望というかサル望がないとボスにはなれないのだ。これは綺麗ごとばかりではなくてな。どんなに親切なサルでも実利に結び付く情報やら権利やらがないとサル望は得られん。簡単に言えば、百日間の親切より一個のドングリがものを言うんじや。今のボスは畑荒しの方法を若ザルに伝授しているというではないか。それがボスの座を堅固にしている基盤じやな。お前がボスになりたいのなら、群れに実利をもたらさねばならん。みんなが利益を実感している間だけボスとして安穩としていられる」

Aは納得した。つまり政治とは利益誘導なんだ。他のサルにはできない、あるいはそれ以上のオイシサを他のサルに与えなければボスにはなれない。

そうとわかつたからには、毎日のように周辺を探検し、澄んだ泉の場所、特に多く実が付く山栗の木、風が吹いても暖かい岩陰などを探したが、それらはすでにボスや取り巻き連中に知られていた。きつと今後も新しい発見などないだろう。ということは、俺はもう永遠にボスになれない。いつて性格も直りそうにない。このまま嫌われ者で一生を終えるんだ。ちくしょう、死んでやる、だけど怖くて死ねない。そうだ、誰かに殺されればいいんだ、となつたのだという。

話を聞いて桃太郎は言った。

「なるほど、辛い理由があるんだなあ。でも、多分死ななくてもいいしボスにもなれるかもしれない。僕に付いて来るか？」と、鬼が島の鬼退治の話をした。

「金銀財宝だつて？俺は欲張りじゃないから三分の一でいいよ。カネに換えれば、どんな食い物だつて買える。それを好きなサルにだけ配ればいいんだ。それで多数派工作してボスを倒す。決めた」

「おい、誰が等分に分けるなんて言った？僕が気分次第で分けるんだ。それでいやなら付いて来るな」

「いや、付いてくよ。今のところ望みはそれしかないから。まあ見てろ、存分に闘うぞ」
こうしてサルも手下になった。

また二三日経つたとき、道の向こうから派手な色の鳥が歩いて来た。一定の歩幅で、一定の速さで、なにがブツブツ言いながら近付いて来る。前は向いているが前をまったく見ていないようで、桃太郎の大八車にも気付かないらしい。鳥は真つ直ぐ突進してきて車輪の下に潜り込みそうになった。桃太郎はあわてて大八車を止

め、「こらっ」と大声で怒鳴った。鳥は初めて気付いたように顔を上げ、まず文句を言った。

「こらじゃないだろ。おいらが仕事してるのに邪魔しやがって。怒鳴るのはおいらのほうだ。まずは、この邪魔っけな車をどけな。ほら、今すぐ」

鳥の種類はキジだった。鳥に怒っても仕方ないが、いかにも横柄なやつだ。

「桃太郎さん、今夜はキジ鍋にしましょう」と犬が言った。サルは後ろからそつと近付き、跳びかかる寸前だ。キジは一步真横に飛び退き、「おいらを食うってか？ 下痢するぞ。ものすごい下痢して死ぬぞ。頭にも体にも線しか入ってないからな。おいらは前人未到の仕事してるんだ」と、また意味不明のことを言った。

たしかに、こんな狂ったキジを食ったら腹を壊すかもしれない。殺すかどうかは別にして、ちょっとからかってやろうと桃太郎は思った。

「これは失礼したな。線ばかりのキジ君。ところで、その前人未到ってどんな仕事？」

「見ててわかんなかったか？ 感どろい奴らめ。測量だよ、地面を計ってるの。歩幅を同じにして歩けば、歩数で距離がわかるだろ。それでこの辺の地図を作ってるんだ。まだ誰も作ってないからな。みんなはおいらを三百六十五歩のキジって呼んでる」

「三百六十五歩？ 一日一歩か？」サルが訊いた。

「ちやうよ。理由は話したくないけど話してやろう。その前に、なにか食えるものがある？」

小さな瞳で見上げられると魔法にかかったような気分になり、桃太郎はキビダンゴを出していた。犬とサルも一本ずつ取った。

「貧しい食い物だな。我慢して食おう」そう言いながらもキジはガツガツと食った。

「まあ最低の味でもなかったよ。なんだっけ、三百六十五歩のことね。おいらたち鳥は物覚えが悪いんで有名だ。

ニワトリなんかは三步歩けば全部忘れるらしい。そこいくとおいらは三百六十五歩までは忘れない。だから歩数を数えて三百六十五になったら、その地面に印を付けるのさ。問題は、どこの地面に印を付けたか憶えてないことで、それが偉業達成の障害になって今のところ解決策はないんだ。カネさえあればなあ」

「苦労してるんだね」桃太郎はキジの地図作りに感銘を覚えた。小さな鳥が、毎日こつこつと働いている。僕にも犬とサルにもできないことだ。「それで、作った地図はどうするの？」

「もちろん売るのが。將軍やら地主やらに。戦争するにも税金取るにも地図は要るだろ。法外な値段でも買うはずだ。戦争してる両方に売ったら二倍儲かるし。行く行くは日ノ本土の地図を作る測量会社を始めたい。そのためには測量用の特殊計器が要るけどね。これがまた高くて」

「どのくらい高いの？」

「うん、型録は持つてるけど、とても買える値段じゃない。ゼロが四つ多い」

「よし、わかった。僕に付いて来ないか。ゼロ四つくらいなら大丈夫だよ。おい犬とサル、こいつに説明してやってよ」

こうしてキジも手下に加わった。犬とサルから話を聞いて、キジは天まで舞い上がって喜んだ。

鬼が島武勇伝

桃太郎は、手下にするなら牛か象がよかったとつくづく思った。大八車を引つ張るのは困難を極め、満月の夜までに鬼が島に到着するため、最後の三日は徹夜で歩いた。三匹は車に乗って寝ているだけで手伝おうともしない。犬の代わりに牛か馬がいたらよかったのに。

それでも、予定の日の夕方には鬼が島が見える海岸に到着した。頭がぼーっとして体調万全とは言い難いが、とにかく着いたのだ。あとは海を渡ればいいだけ。桃太郎は眠気が限界に来ていて、一時間だけ仮眠を取ることにした。その前にキジに、「ちょっと偵察してきてよ。あの島に鬼がいるかどうか見てきて」と頼んだ。キジは、「おいらは鳥目だから、こう暗くつちやよく見えない」などと文句を言いながらも飛んで行った。桃太郎はサルにも、「船を捜してきてよ。大八車は積みなくていいから手ごろなのを」と言い付け、その場に倒れて込んで大いびきをかきだした。

一時間後、犬は懸命に桃太郎を起こそうとしたがまるでだめ。濡れた鼻面を押し付けても、歯のない口で噛んでも反応なし。参ったなと思いつながら孤軍奮闘、どうにかして起こそうとジタバタしていた。そのうちサルが帰ってきて、「船はあったよ。かつばらつてきた」と桃太郎に報告しようとしたが、まだ寝ている。サルは一計を案じ、桃太郎の耳に、「鬼に気付かれましました。あなたの金銀財宝、持ち逃げします」と囁いた。桃太郎はガバと跳ね起き、「許さないっ」と叫んだものだ。

キジはどこからか歩いて帰ってきた。「鳥目の鳥を夜間偵察に出すなんて不適切な人事の見本だ。行きは少し明るかったからいいよ。帰りはどっちが岸だかわかんなくて、とんでもない場所に着陸しちゃった。そこから一時間も歩いて帰ってきたんだ。もうやだからね。夜は絶対に飛ばないから」と、えらく立腹している。「あの島に鬼はいたかい？」と桃太郎が訊いても知らん顔。キジダンゴを食べさせ、さんざん機嫌を取ると、やっと少し怒るのをやめて、「暗くてよく見えなかったけど、数十人くらい生き物がいた。鬼かもしれないし人間かもしれない。細かいことまでわかるかよ！」とまた怒り出した。

鬼が島というくらいだから鬼がいるのだろう。キジが見たのは鬼に違いない。桃太郎は攻撃地点を特定した。攻撃開始時刻は二イニイマルマル時。それまで渡海行動を完了しなくてはならない。そこで、二イイチサンマル時に船を出すことに決めた。

大八車は木製だから水に浮く。海に放り込んで荒縄で船尾に結び付けた。ところがこれが大間違いで、艀をこぐと縄が引つ掛かる。こぎ手は桃太郎だけ。手下どもはまったくの役立たずだ。桃太郎は体の動きを邪魔する刀を腰から外し、弓矢を背中から下ろし、一本の旗指物も取って死に物狂いでに舟をこいだ。三匹の手下は、捕まえたカニを賭けてジャンケンで遊んでいた。

予定時刻より三十分も遅れたが、舟は島に着岸した。満月の明るい下で、大きなかがり火を囲んで鬼たちが踊っていた。赤や青の体にトラの皮の褌を締め、頭には角を生やしている。まぎれもなく鬼だ。踊り手は二十匹ほどいるだろうか。その周りを老若男女の人垣が幾重にも取り囲み、踊りをはやし立てている。こっちは人間のようだ。桃太郎には不思議だった。鬼の踊りを人間が見て喜んでいる。彼らは奴隷化された人間だろうか。いずれにしても鬼がいることはわかった。あいつらを成敗すればいいんだ。手下三匹に手で合図して、桃太郎たちはいっせいに踊りの輪の中に飛び込んだ。

予定では、正義の味方の登場で悪漢どもは逃げ惑い、あたりは阿鼻叫喚の修羅場になるはずだった。しかし全然違った。

乱入した桃太郎一行を全員が拍手と歓声で迎えたのだ。これは最大の侮辱である。鬼退治に来たのであって歓迎されるいわれはない。血相を変えた桃太郎が抜刀しようと腰に手をやったが、刀は舟の中だ。無意識に弓を取ろうとしても、やはり舟に置いてきていた。桃太郎は狼狽した。犬、サル、キジも所在なげに立ってる。観衆は桃太郎のあわてぶりを最初の「つかみ」だと思って大笑いした。その後、桃太郎が思案したり怒ったりしているのも真に迫った芸と勘違いされ、鳥が揺れんばかりの爆笑の渦になった。桃太郎の衣装、白地に桃のアップリケいっぱい、このシーンでは芸人にしか見えない。

えい、こうなったら仕方ない。僕一人がシリアスに構えていても間抜けに見えるだけ。いっそ付き合っちゃまおう。桃太郎は腹をくくった。

「とどいとおざーい、お招きに預かりました桃太郎一座めにございます。今夜は雲ひとつない満月の下、少々知恵の足りないエテ公と、齒はないが知恵のある犬、三歩歩いても記憶力抜群のキジによる一大イリュージョンをお目にかけてます」もうヤケだ。ここは恥をしのんで仮の姿で楽しませ、後で寝首を掻けばいい、とプランBに切り替えた。

観衆の中から小さい女の子が桃太郎を指差して「かわいい！」と叫んだ。僕はかわいいのだ。芸人冥利に尽きるなあ。くそつ。

「さあ、みなさん手拍子を」

桃太郎の音頭で拍手が始まり、サルが登場した。サルは前転、バク転、ひねり技などを披露し、最後は反省のポーズで決めた。

次は犬だ。桃太郎は手を挙げて聴衆を静め、「さて迷い出ました貧相な犬一匹、ちょっと見はただの犬だが中身は違う。国立研究所某博士の実験台となり、高度な知能を授かった世界でも稀有な犬。お立会いのみなさん以上に読み書き算盤、孔子に孟子、バテレンの妖術まで何でもこなします。今夜はほんの手始め、算数の問題を解かせましょう。どなたか数字をふたつ言っていただけはないか」

見渡すと老婆が手を挙げていて「ひとつとふたつ」と言った。犬は即座に三回吠えた。観衆は感心したのだろう、大きな溜息が広がった。その後、みんなが数字を言いたがり、犬が十問ほどこなしたとき、酔っ払いが「二ひく三だ」と怒鳴った。犬は一瞬考えるふりをして、それからフーフー言い出し、一度だけ吠えた。

「さてお立会い、今のがおわかりだろうか。犬はフーフー、つまり負だと言い、それから一だと申しました。つまり負の一、マイナス一で、これも大正解にございませう」

あちこちから投げ込まれる食い物を拾いながら犬は後ろに下がった。最後はキジの演技だ。

「日ノ本広しといえど、歩いた距離をその場にて寸法で言い当てるなど、できるご仁はあらせられまい。ましてやそれが畜生の鳥となつては、信じるも自由、疑うも自由でございます。今みなさまの眼前を汚しますこのキジ、遠く筑波の山中にて足掛け十五年の修行を重ね、ついにその技を会得したと申します。まずは小手調べ、そこなる小屋の軒の長さを計らしてみましよう。さあ、測っておいで」と、桃太郎が前の小屋を指差すと、キジは飛び上がって軒の端から端まで歩き、「ケケツ」と叫んだ。

「鳥の言葉は、みなさまおわかりになりますまい。そこで私めがただ今のケケツを翻訳いたしますと、二間と五尺三寸五分だそうでございます」

観衆がざわついた。桃太郎は涼しい顔で待っていた。大工風の男が出て来て、長い物差しで軒の長さを計った。「えーと、二間と、五尺、えー三寸五分」

驚きの声がどつと上がり、次はここを測れとか、月まで測れとか、様々な声が聞こえた。キジがどこを何度測っても決して間違わず、最後にはかがり火の周りを飛び回り、火の直径を測ったりもした。

ここで桃太郎が進み出て、

「旅芸人のつたない技、お楽しみいただければ幸甚に存じます。本来でしたら最後に私めが、居合いと槍術をご披露いたすところですが、なにぶん夜分、間違いがあつては困ります。後日、明るいお日様の下で、とくにご覧いただくとして、今夜はこれにてお開きとさせていただきます。ありがとうございます、ありがとうございますございました」

桃太郎と三匹が、大きな拍手の中を後ずさりで見明かりの届かないところまで下がろうとしたとき、暗闇から誰かが呼びかけてきた。

「桃太郎？ そうだよね、たしかに桃太郎だね」

桃太郎臉の母

暗がりから二十代後半にみえる女性が現れた。桃太郎は「これはまずい」と、一瞬逃げ腰になった。この年代の女性をなんと呼んだらいいのか、いつも困るのだ。「おねえさん」にしては歳を取っているし、「おばさん」にはまだ間がある。誰か適切な呼び方を考えてくれないだろうか。

「足軽村の桃太郎だね。私を見ておくれ。よく見ておくれ」女性は必死の面持ちで近付いて来る。

「どなたか存じませんが、たしかに僕は足軽村から来た桃太郎です。申し訳ありません。お顔を拝見しても、どなたなのかさっぱり」

「母さんだよ。お前を産んだ母さんだよ。憶えていないのは仕方ない。生まれ落ちたお前を桃の籠に入れて置き去りにしたのも。許しておくれ桃太郎。どうしてもお前を生き延びさせたい一心から、お前を捨てたこの母を、もしも許してくれるなら、どうか一声、母者と呼んではくれぬかえ」と、女性は桃太郎の足元に崩れ落ち、激しく泣き始めた。

「おお、母上。どうぞお手をお上げください。泣いてなさつては始まりません。さよう、僕は桃太郎。桃の籠にて捨てられて、拾われたのは藪の中、尾羽打ち枯らした庄屋夫妻。いや、その経緯は問いますまい。いや、聞きますまい。聞いたところで詮無きこと」

「さぞ辛かったろう桃太郎、拾った庄屋は鬼悪魔、人の生き血で肥え太り、百姓などは牛馬も同然、無法な地代で蓄財し、溜めにためたる蔵五戸前、そこにお前を捨てたのは、命あつてのものだねと、」

「さて、これはまた面妖な、なにをわざわざ鬼畜生に、僕の命を預けられた。どうせお預けくださるなら、貧

しくあつても善良な、好爺好婆がいるだろうに」

「話せば長きことながら、これには仔細があるのじゃえ。戦乱迫るその中で、へその緒残るわが吾子を、生き延びさせるは至難の業、たとえ惠徳庄屋でも、預ける先は他にあらなんだ。いずれおいおい話しましょう。きつとお前もわかるはず。ああ、桃太郎や、もう一度母さんと呼んでおくれ。呼んでおくれな」

「何度でもお呼びしましょう。母上、母堂、おかあさん、かあちゃん、おつかあ、ママ、オモニ」

「まさか生きて会えるとは、ああ桃太郎、桃太郎。母さんはもうお前を離さないよ」

「おかあさ〜ん」

桃：たとえ不幸な生い立ちでも、拾った親が因業でも、今となつてはしようないこと。すべては尾張の庄内川、恨みつらみは伊勢湾に、さつさと流してしまひやしょう

母：いえいえそれは桃太郎、流す間引くができたなら、こんな思ひは縁なきころ。いずれわが子と巡り会い、

親子二人の朝夕餉、涙に変えたる母者の願ひ、堰があつても止まりませぬわいなあ

桃：関でも止まらぬ母者の思ひ、箱根の山をも下に見て、降り立つ今宵は満願成就。されば母者、いざこれへ、

いざこれへ

と、桃太郎が手招きし、近付いた母の耳元に何か囁く。母は思ひ入れたつぷりに何度も頷き、次第に明るい顔になる。

母：それならそうと桃太郎、夢にまで見たわが子と添い寝、今すぐ床を敷きますゆえ、こちらへおじゃれ、はようおじゃれ

と、母は桃太郎の手を引いて下手にはける

「母も母なら子も子だね。乗りやすいのは血筋だな」と犬が言った。三匹は、この下手な田舎之居を、あきれ返つて見ていたのだ。

「おーい、桃太郎の大将、残りの仕事はどうするんだ？」サルが暗闇に叫んだ。

「明日だ、全部明日。僕は眠くてたまらない。やつと布団で寝られる。おやすみ」暗闇から桃太郎の声が答えた。

今回の任務のうち、完了したのは鬼が島に上陸したことだけ。鬼退治には取り掛かれず、金銀財宝も未発見。要するに何もできていないのと同じだ。犬、サル、キジの三匹は、「桃太郎が大将で大丈夫だろうか」と心配になつてきた。

当の桃太郎は翌朝、母手作りの朝食をたらふく摂り、大あくびをしながら外に出てきた。

「あーあ、気持ちいい朝だな。久しぶりに布団で寝ると、煎餅布団も羽根布団みたいだ。おい、三匹はよく眠れたかい？」

「まあね、おかげさまで」とサル。「ぼちぼち」と犬。「適当な枝がなかった」とキジ。

「ねえ桃太郎、行きがかり上とはいえ、事態は鬼と仲良くなる方向に動いてると思うけど、いつ征伐を始めるの？ やらないと財宝の在りかもわかんないし」とサルが三匹を代表して言った。

「そうだねえ、いつと言われても。僕たちはすでに鬼の社会に溶け込みつつある。いわば密偵的な立場、換言すれば獅子身中の虫だから、そう急ぐことはなく、吉日を選んで挨拶してから」

「あの、ですね、結納を収めに行くんじゃないからね、速戦即決がいいと思う。おいらだつてそうそうヒマな身分じゃないし」キジは不満そうだ。

「右に同じ。歯茎まで壊れる前に入れ歯作らないと」と犬。

「ううん、僕としては過度な斬り合いは慎みたい。できれば談判で財宝だけもらうとか。だめかな？」桃太郎は母と暮らしたいのかもしれない。

「それでもいいけどね。金銀財宝が手に入るなら手段は問わない。けど、いくらなんでも丸腰じゃ談判もできないでしょ」犬が言ったので、桃太郎はやっと思い出した。

「そうだった、まだ舟に刀はあるかな。流されたり盗まれたりしてたら大変だ」

桃太郎と三匹は海岸に走った。舟はあった。武器もそのままだ。大八車は少し沈み加減だがつながつていた。「よかったなあ、どうやらこれで手ぶらで帰らなくても済みそう」桃太郎は安堵した。

そのとき、すぐ近くから数人の男の声が聞こえてきた。海に入って、なにやらじゃぶじゃぶやっている。

「これには毎年苦労するよ。塗るのはいいが落とすのに丸一日かかる」

「だから剥げなくていいんだよ。汗で流れたら縞模様だ」そして爆笑していた。

桃太郎がそっと覗くと、十匹ほどの赤鬼青鬼が体を洗っていた。朝だからだろうか、全真角を外している。さらによく見ると、鬼の顔も外して、人間の顔の仮面を被っている。そうか、いつもはこうやって人間に化けているんだ。桃太郎は吉日を選ぶ方針を撤回し、刀を抜いて海岸に仁王立ちに立つと、

「やあやあ鬼ども、正体見たり。いざ神妙に天誅を受けよ」と呼ばわった。

鬼は一斉に振り返った。

「やあ、きのうの夜はご苦労さん。面白かったよ。まだ子どもなのに立派な芸だとみんなで感心してたんだ。居合い抜きを見せてくれるのかい？ちよっと待ってね。鬼の塗料を落としてから、ゆっくり見せてもらうから」年かさの鬼がそう言った。

あれっ、少しヘンだな、と桃太郎は思った。鬼が体をこするたびに赤や青の色が落ちる。よく見ると、どうやら顔も仮面ではなさそうだ。もしかして人間？鬼じゃないの？

「なので、てつきり本物の鬼だと思っちゃって。昨夜、武器を忘れなければ踊りに乱入するところでした」

「そりゃ剣呑だ。鬼祭りで鬼が殺されるなんて、爺さんに聞いても、そんなためしはないだろうよ」

この部落のまとめ役の家で、桃太郎一行は焼いた餅をご馳走になっていた。この家で鬼の面も見せてもらっ
たし、虎皮の褌は実は藁の腰蓑で、墨で横縞を描いたものなのもわかった。

「せっかくのお祭りを物騒な騒ぎにするところでした。申し訳ありません」

「いやいや、済んだことだ。それよりとっさに旅芸人に化けるなど、あんたも三匹も多才だねえ」

「お褒めに預かって嬉しいやら恥ずかしいやら。でも、どうして鬼のふりして踊ってたんですか？」

「あれはね、鬼祭りといって、わたしらの村に古くから伝わる慣わしなんだよ。人の心の中には、どんな善人でも鬼が住んでいる。その鬼を、十月初の満月の晩に、お月様に吸い取ってもらうんだ。酔って踊っていたのは村人全員の鬼を引き受けた踊り手で、だから鬼の恰好をしていたのさ。年に一度鬼を追い払ってしまえば、それ以外の毎日は仏の心で過ごせるって、まあそういうったわけだ」

餅で腹がいっぱいになると、サルが桃太郎に囁いた。「金銀財宝、場所訊いて。訊かなきゃ俺一匹でも探さず」
「あはは、サルが便所に行きたいそうです。おいサル、勝手に行けばいいだろ」

サルはほっぺたを膨らませながら出て行った。

「ところで桃太郎さん、聞いた話じゃ、あんたはももさんの生き別れた一人息子だっていうじゃないか。本当かね？」

「はい、昨夜遅く、十二年ぶりで母と再会しました。ていうか、以前会った記憶がないので、初対面というか」
「それは重畳。わたしら村人も、ももさんの赤ん坊のことはずっと気になってたんだ。生まれたのが大騒動の真っ只中だったから。連れて行くというももさんを、村人総出で思い留まらせたこともあったし。まあよかった。これで村の重荷がひとつ軽くなった」

「その、僕が生まれたときは、母は戦乱が迫っていたと言うし、今聞けば大騒動の真っ只中とのことですけど、それって一体なんですか？ 爺さんからも婆さんからも、そんな話は聞いてないですが」

「やっぱり気になるかね。気になって当然か。自分が母親と生き別れた原因だからね。桃太郎さん、少々込み入った話だが、聞く気はあるかい？」

「ええ、是非。昨夜はよく寝たので頭はハッキリしています。どうかお話ください」

「それでは話そう。でもその前に、あなたを育てたのは庄屋の爺と婆ですよね？」

「はい、庄屋といっても、村には二人しかいませんが」

「まだお元気でご存命か？」

「ええ、お陰さまでピンピンしています」

「そうか、ご存命なのか」溜息混じりに言って、男はしばらく沈黙した。

桃太郎出生秘話

しばらくすると、部落のまとめ役を名乗る男が語り始めた。

「今でこそわたしたちは、ここ、鬼が島に隠れ住んではいるが、元は真面目な百姓なんだ。桃源郡足軽村に先祖代々の田畑があつて、天地開闢の昔から住んでいた。山間の農村としては豊かなほうだったから。次男坊、三男坊もどうにか食えて、博打うちやヤクザ者を一人も出さなかつたのが自慢だ。わたしも、とても幼い時分には餅や赤飯をたらふく食つた憶えがある。」

村人の運命が変わつたのは、先代の庄屋さんが死んで息子が跡を継いだときからだ。そうさなあ、今から三十年近く前のことだよ。先代はそれはそれは優しい人で、泣くも喜ぶも村人といつしよ、凶作の年には水しか飲まないような立派な人だった。でも、息子というのはいい噂が聞こえて来ない人で、いわば村の鼻つまみ者。酔つて田畑を荒らしたり、若い娘を追い回したりで手が付けられなかつた。そして案の定、代替わりした途端に息子は威張りだして、地代をいきなり五倍に上げ、『文句があるなら代官所へ』が口癖で、まるで領主のように振る舞い始めた。

村人は面白がるうはずがない。不満が高まり始めると、今度は『地代と年貢が上がつた分を取り戻させてやる』と言つてきた。協同組合を作るといふのだ。村人の作物を組合で一手に引き受け、一番高く買つてくれる業者に一括納入するという。今までより高く売れるから、いくら地代が高くても取り分は昔と同じになるといふんだ、うまい話だった。ついでに種籾や野菜の種も組合で管理するし、カネのない農家には融資もすると約束した。おいしそうな話だろ？ 村人はこの話に乗ってしまった。庄屋は『自由農民曙会』（通称JA）という

組合の看板を上げて、自ら永代理事長に納まった。

ところがどうだ、村人の収入は全然増えない。減ってるくらいだ。作物を、ニンジン一本まで庄屋に渡さなければならぬので、よその村に売りにも行けない。じゃあ庄屋が買い取る値段はというと、これがひどく安いんだ。庄屋はたしかに幕度鳴度や出新食堂には高く売っているのに、農民には払わない。訊いてみると『手数料だ』という。そして、いろんな数字を出して説明するのだが、農民は数字に弱い。理解できないうちに丸め込まれてしまうのが常だった。村人はますます貧乏になった。どうにも食いかねて娘を手放す者が現れると、女衞を紹介して、また手数料を取った。

二年もすると、庄屋の家の庭に最初の蔵が建った。庄屋は『物置だ』と言っていたが、使用人の話ではコメが溢れるほど詰まっているという。蔵は二年に一戸前ずつ増えた。

そのころ大飢饉があった。日照りと長雨が重なって、コメはいつもの一割も取れなかったが、それでも庄屋は地代と年貢を取りにきた。村人の誰一人、払えるものはいない。すると庄屋は『組合の融資を受けないか』と提案してきた。支払いの不足分は組合が貸す、というんだよ。自分たちの組合だと思っていたから、みんながこれに飛び付いた。でも、いざ借りてみると、証文が読める寺の和尚が驚いて、半鐘を鳴らしてみんなを集めて証文の内容を読んだんだ。そのときつくづく感じたね。農民でも字くらい読めなくちゃって。

利息だよ。月に一割五分の利息が付くってわかった。しかも複利だ。借りっぱなしで一年したら、借りた二倍返しても足りないんだ。村人は全員、えらいことをしてしまったと思っただが、今さらどうにもできない。そのときから足軽村の村人は、全員が借金でがんどじがらめになってしまった。極めつけは翌春の種まきの時期、それまで作物の種はただ同然だったものが、去年の不作を理由に、一挙に百倍近くになっていた。いや、世間一般は知らないよ。足軽村の庄屋は不作を理由に値上げしたんだ。百姓は種がなければ仕事にならない。みんな泣く泣く、また組合から借金して種を買った。これですます、いつまで経っても返せない借金ができたわけだ」

「ひどい話ですね。その庄屋って、どこのどいつですか」桃太郎が訊くと、男が答えた。「あなたを育てたお爺さんだよ。足軽村に庄屋は一人だから」

「それからというものは、足軽村の村人はいつも借金に追いかけられ、大豊作の年でも自分の作ったコメさえ食べなかつた。もちろん庄屋を恨んではいたが、逆らったら何をされるかわからない。代官所に訴えようと一揆を起こそうとか画策する人もいた。ただ、そうしても百姓側が負けるのはわかってた。庄屋が代官をはじめ、主だった役人に付け届けをしているのを知っていたからだ。

苛められていたのは村人だけではなかつた。庄屋の屋敷で働く女中や下男もまるで人間扱いされていなかった。庄屋は女中を押し倒し、孕んだのを知ると、なにかと難癖をつけて不忠者に仕立て上げ、生まれる前にヒマを言い渡した。下男や飯炊きも、ちよつと気に入らなければ寒中の井戸浚いなど、とてもできない仕事を言いつけられ、堪らずに逃亡するに任せた。これは村人には好都合で、逃げ出した元雇い人から屋敷の中の様子をこまめに聞いた。

屋敷に五番目の蔵が建ったとき、村人は『またコメを溜めるんだろう』と言いつつ。しかし、五番蔵はコメ用ではなかつた。庄屋は年々溜まるコメの処理に困っていたのだ。どうもコメというものは嵩張っていけない。時間が経てば虫が付いて売れなくなるし、そうだと、いつそのこと蔵に入らないコメは高値で売り払って、金銀に換えてしまえばどうだろう。庄屋はすぐに実行した。そして買い集めた財宝を仕舞うのが五番蔵だ。財宝は嵩張らず、時間が経っても虫は付かない。これでしばらくは安心できる、と思ったのもつかの間、五番蔵

もいっばいになり始めた。掛け軸や茶道具などにしたのがいけなかった。やっぱり金銀が一番だと、庄屋は財宝の買い替えを始めた。と、このあたりの話は屋敷から逃亡した下男女が、村人に鬱憤晴らしで話してくれたことだよ」

「それじゃあ、僕が住んでいた家の蔵には、コメや財宝が詰まっていたんですか？ お爺さんは『全部空っぽだ』と言ってましたか？」

「いや、それはそのう、爺さんの言ったのは正しい。桃太郎さんが物心ついたときには、蔵はカラだったはずだ。その話はこれからしよう。」

そう、十二、三年前の鬼祭りの日だ。餅もなく、コメさえ食べない惨めな祭りだった。祭りの後の寄り合いで、一部の村人が『もう我慢できない』と言い出した。一部の、と言ったが、実はわたしだ。その何日か前に、どうにも許せないことを聞いてしまい、居ても立ってもいられないほど怒っていたわたしは、みんなに決起を呼びかけた。桃太郎さん、これから話すのはあなたのお母さんの、ももさんのことで、決して気持ちのいい話ではないが、聞けるかい？」

「はい、ここまで聞いたら全部聞きたいです」

「じゃ、気を悪くしないで聞いてくれ。ももさんというのは村で一番、いや日ノ本で一番と言ってもいい器量良しだった。かわいくて、小悪魔的で、蠱惑的で、それはもう、どんな褒め言葉を並べても言い表せないほど最高の娘だった。いや、今でも充分美人だがな。わたしもそうだが、村の若い衆はみんなせから惚れていて、できれば嫁にほしかったが、あまりに良い女だと、逆に誰もちよっかいを出せないんだ。もしわたしが抜け駆けでもしたら他の連中に殺されかねない。そんなわけで、誰も手を出せず、崇拜の対象になってしまい、いわゆるマドンナ化していたと思うてくれ。うん、思い出すと今でも顔が赤くなる。いい女だったなあ。」

あとで知ったことだが、五月ごろの夕方だったそうだ。庄屋の家からももさんの家に使いが来て、大根とニンジンを持って来いといわれた。運んで来るのももさんにしろとも。大根とニンジンくらいで済むならとももさんは袋いっばいに詰めて庄屋の家に運んだそうだ。そうしたら庄屋の婆さんは留守で、使用人の姿もない。一人で居た庄屋が、それを台所に運べと言ったそうだ。ももさんが台所に行くと庄屋も付いてきて、なんとそこで手籠めにされてしまった。実は、そのとき出来たのが、あなた、桃太郎さんなんだ。聞かなきゃよかったと思っっているんじゃないかね？」

「いいえ別に。その手籠めとやらで、どうして僕が出来るんですか？」

「そりゃ、そのう、困ったな」男は頭をポリポリ掻いた。近くで寝ていたはずの犬が桃太郎の袖を引っ張り、「話がある」と言うので、桃太郎は犬に連れられて外に出た。

「あのさあ、モノを知らないのにも程があるよ。爺さん婆さんに純粋培養されたにしても、さっきだって女中を押し倒して孕ませたとか、あったじゃないの。わかんなかったの？」

「うん、わかるどころだけ聞いてたから」

「あきれたね。あの人だって、本人に言いにくいこと話してるんだから、桃太郎さんも理解しなきゃ。じゃね、最初から話すから、ちゃんとわかっつてよ」と、犬は雌しべと雄しべから始めて、人間誕生の秘話を語った。

「そうなんだ、知らなかった。それなら雄しべがお父さんになるから、えっ、僕の父上はお爺さんってこと？」

「そうなるね。金持ちにありがちな泥沼関係」

「なんか、納得するまで時間がかかりそうだ」そう言いながら、桃太郎と犬は家に戻った。

桃太郎が理解した様子なので、男は話を続けた。

「ももさんは、泣きながらも庄屋がくれた一分銀を投げ返し、家に走って帰った。両親はもちろん悲しみ怒っ

たけれど、訴えるには相手が悪い。はらわた煮えくり返りながらも泣き寝入りするしかなかった。

そのうちにもさんの腹が大きくなってきた。祭りの前になると、目ざとい村のかみさん連中が噂するようになって、わたしら若い者の耳にもその噂は聞こえてきたから、仲間内で犯人探しが始まった。誰かが夜這いをおかけたに違いないって」

「夜這いって？」

「それ知らない？ そうだろうな。あとで犬に聞けばいいよ。えっと、大騒ぎして調べたが、若い者も、若くない者も、みんな天地神明にかけてやってやらないと言う。ももさんも騒ぎを知って、『私のせいで村がモメては申し訳ない』と、ついにかみさん連中に事実を打ち明けたんだ。庄屋のジジイだってね。それが祭りの五日前のことだった。

わたしが堪忍袋の緒を切らしたのはそのときだよ。これまで好き放題に村人の作物を取り上げて、みんなを貧乏にただけではまだ足りずに、村の男全員が恋焦がれるマドンナを手に掛けるとは、まさに物心両面での蹂躪だ。ここであの傲慢庄屋を足腰立たないまで懲らしめなければ男じゃない、ももさんに焦がれる資格もない。わたしは本当に死ぬ覚悟をした。

それで、祭りのあとの寄り合いで、村人全員に蜂起を呼びかけたってわけだ。理由など今さら言う必要はない。私と同じように決死の覚悟の若者は何人もいた。みんな鬼の恰好をしたままで『殺してしまえ』とか『焼き討ちだ』なんて叫んでいたから、知らない人が見たら、迫力だけでも本物の鬼に見えたらうな。幸い、そこには村人以外いなかったけれど。

わたしたちは朝方まで話し合った。庄屋を成敗するといっても、具体的には何をすれば成敗になるのか、誰もわからなかったんだ。そして最後には、くじ引きで当たった幸運なやつが、鬼の姿のまま屋敷に乗り込んで

庄屋を殺す、と決まりかけた。

わたしらは興奮していたので気付かなかったが、隅の柱の陰で寺の和尚さんが最初から聞いていた。庄屋を殺すと決まりかけたとき、和尚が初めて口を開いた。

『あのような愚かな男を殺しても、人殺しには違いない。もし捕まれば獄門晒し首じゃ。馬鹿らしいと思わんか』と言った。そりゃ馬鹿らしいのはわかっているけれど、もとより捨てた命、晒し首だって怖くない、と切り返そうとしたとき、和尚はまた言った。『庄屋を殺して自分も死んだら心中にしか見えんぞ。心中とは、もつと色っぽいものだろう』

たしかにな。あんなジジイと抱き合い心中なんて、死んでも御免だ。

『お前たちの首の上に付いているのは編笠の台か？ 武士なら頭がカラでも仕方ないが、農民なら少しは中身があるはず。頭を使わんヤツは、最後にや墓にも入れてやらんからな』これにはみんな驚いた。いつもはぼぼ温厚な和尚が、わたしたちを墓に入れないと啖呵を切ったのだ。

『とはいえ、一晩話し合っても斬り込みしか思い付かん連中に良い知恵など期待できん。わしからひとつ提案してやろう』と、話してくれたのが今回の一連の筋書きなんだよ。

簡単に言えば村人全員が一人残らず一斉に夜逃げするんだ。田畑や家を放り出して、持って行く財産でいったって鍋釜と野良着くらいだから逃げるのは簡単。庄屋は肝つ玉が縮み上がるだろう。一人や二人の離村なら、一応追手をかけてみて、すぐにあきらめて人別外にすればいい。でも村人全員を一度に人別外にするなど、代官に知れたら庄屋がきつい仕置きを受けることになる。まあ、人別外にしようにも、過去帳も人別帳も和尚が持って逃げるから庄屋には手が出せないんだが」

「そんなこととして御法に触れませんか？ 捕まったら島流しかも」

「桃太郎さん、あなたは純情だねえ。いいですか、何かをして、それが法に触れるか触れないかは、まず発覚するかしないかにかかっている。発覚しなければ問題はなし、たとえ発覚しても、今度は裁く側が裁く気にならなければ問題はなし。そして、最悪裁かれたとしても、いいかい、裁くのは人間だ。そいつの損になるようなお裁きをするはずがない。それが世の中だよ。」

わたしらの場合、たしかに庄屋は気付くだろう。村が空になるんだからね。だけど、わたしらを罰するためには代官所に訴えなければならぬが、そんなことしたら庄屋自身の首が危ない。庄屋が民百姓と刺し違える気になれば別だが、あの因業にはそんな気はさらさらないだろう。と、まあ、これは和尚の見立てだった。

訴えられないとわかっていけば、もうひとつ悪戯ができる。蔵のコメを運べるだけいたくんだ。四戸前もあるので全部は無理だろうが、総出で運べば二年や三年は食いつなげる。で、どうせ蔵破りをするなら、行き掛けの駄賃で金銀財宝の蔵に手を付けない法はない。そつちも全部運び出す。いや、これは泥棒ではない。そもそもがわたしたちの財産だから。庄屋がJ Aという怪しげな組合を使って、わたしたちから盗んだ財宝だ。それを返していただく。庄屋ではないから利息まではもらわない。道理に合ってるだろう？」

「素晴らしい発想ですね。考えた和尚さんは天才だ。一度教えを請いたくなりました」

「ああ、和尚は裏の岩山に住んでる。酒は喰らっているが、まあまあ正気だ。隣にあった神社のご神体も奉つて、流れ着いたバテレンの十字架も立てて、神仏の番人を自称しているよ」

「さぞ名僧知識なんでしょう」

「さあ、どうだかな。時々冴えたことを言うが普段は生臭坊主だよ。で、和尚の話はいいとして、わたしらの空前絶後の一揆が決まると、若い連中は明日にでも旗揚げしようと思気込んだ。いやいや、この計画は情熱だけでは成功しない。事前の調査と準備、なにより村人全員の一致団結が要る。わたしは若者のうち、少しは話

し合いができる者を集めて、村を一軒ずつ回らせ、住人の真意をたしかめ、計画を徹底させた。話などできない行動派の連中には、村人が逃げ込む先を探させた。近すぎず遠すぎず、難攻不落で、今の村から大八車でも行ける場所。なにしろ蔵の中身を運ぶのだから、人が担いで運ぶのでは無理だ。馬や牛はそれほどないし。年末までに準備は終わっていた。逃げ込む先は、ここ鬼が島に決まった。もつとも、当時は島に名前などなかった。誰も来たがらないように、わたしたちが鬼が島と付けたんだ。怖そうだろう？村人側から見れば、ここは天国になるはずなので、たとえば太平洋天国島なんていう案もあったけれど、温泉地と間違えて観光客が来そうだから却下になった。

新年の寄り合いで、実行は三月末か四月初めと決まった。少しは暖かくなるとな。島に着いた方がいいが、家もなく風除けもなく、寒さに震えるのはあまり利口ではない。暖かくなりかけた頃がよからうということだ。ただ心配なのはももさんで、正月には腹が前に迫り出して、産婆が言うには一揆のころに生まれそうだと。若い連中は、まるで自分が父親みたいに心配したものだよ」

鬼、春に踊る

「その前夜、月のない暗闇の中、女子ども、年寄りから村を出発した。残ったのは男衆だけ。早速体に赤と青の色を塗り、鬼踊りの衣装になった。庄屋の家の近くまで音を立てずに近付いて松明を灯すと、一斉に鬼の叫びを上げながら庄屋の屋敷に駆け込んだ。」

「あらかじめ庄屋の奉公人には計画を知らせてあったから、鬼たちは拍手で迎えられ、奉公人は蔵の鍵を次々と開けた。驚いているのは庄屋夫妻だけで、庭から座敷に飛び込んだ鬼を見て、まず庄屋が目回し、婆さんは念仏を唱え始めた。まさか本当の鬼だと思ふなんて考えてもいなかった。ちよつとした計算違いだ。正体を明かしたものでどうか。」

「わたしが迷っているうちにコメはどんどん運び出され、満載した大八車が出発して行った。宝物蔵は、それは大層なものだったよ。大判小判、金銀の延べ棒、銀の塊、なにやら古そうな茶碗、掛け軸、いまや貴重な珊瑚、世界の財宝が全部集まったような景色だ。全部いただけば気持ちはスッキリするが、事前の申し合わせで書画骨董の類は置いて行く。何故だつて？そりゃ簡単に足が付くからね。有名な茶道具などは、今誰が持っているか世間に知られているものだ。そんなのを古道具屋に持ち込んだら一目で盗品とわかつてしまう。それを端緒に一大窃盗団の捜査が始まるかもしれない。みかど直属の役人が捜査するのだから、もし始めれば庄屋も代官も止め立てできない。わたしらにしても、みかどまで敵に回したくはない。」

「そうか、誰かが訴える以外にも、国の権力が調べ始めることもあるんですね」

「そうだよ。みかどのために動く役人は強いよ。ただ、いつも正しいとは限らないがね。まあそれはいいや。」

「だから足の付きにくいカネや金銀がいいんだ。いざとなれば鍛冶屋が鑄潰して別の形にもできるし。」

「庄屋の家には大八車が十台以上あった。それらを全部満載にしてもコメはまだ余っていた。もちろん骨董品は山ほど残っている。わたしたちは庄屋とは違うから、根こそぎ持って行きはしない。爺さん婆さん二人で暮らすなら、残っているコメと古道具で十年は持つ。わたしは最後に、それなりの挨拶をすることにした。庄屋に水をかけて起こし、鬼の面をとって『村人のために蓄えてくれてありがとう』と言ってやったんだ。そのときの庄屋の顔は忘れられない。人間の顎は、あそこまで下がるものなんだなあ。」

「屋敷の奉公人も全員付いてきたから、これで足軽村にいるのは庄屋夫婦だけになったはずだが、そのときはまだ村人が四人ほど残っていたんだ。ももさんたちだよ。もうすぐ生まれるというので、今は動けないから裏山に隠れていた。ご両親もいっしょで、若い者の中から一番機転が利く呉作が護衛役だった。ここから先は呉作から聞いた話だが、ももさんは鬼が暴れている間に出産した。あなたが生まれたんだ。常套句だが、それはそれはかわいい玉のような男の子だったという。小枝のような女の子や、岩のような面構えの男の子だったら困るけど、幸いそうではなかった。」

「ももさんは赤ん坊を連れて、すぐにでも出発したがった。しかし両親は迷った。ふたつ理由があったからだ。引越し先の鬼が島は海に近くて暖かいとはいえ、まだまだ春先。しかも最初は屋根もない野宿になる。赤ん坊には辛すぎるだろう。凍えて死んでしまうのではないか。もうひとつは、ももさんの将来を思つてのことだった。いくら器量良しでも、赤ん坊付きでは嫁の貰い手はない。両親が育てることも考えたが、それではいつまでも母と子の縁が切れない。ここはひとつ、父親である庄屋に引き取ってもらったらどうか。」

「今のような平和なときなら、この判断は人非人でもしないだろう。ただね、あの大騒ぎの中では、誰が何を考えても不思議ではなかったんだ。」

結局ももさんは、せめて名前だけは付けたいと言い、ももの子どもだから桃太郎と名付け、父親が急いで作った紙貼りの籠に入れ、『桃太郎です。よろしく』と書いた札を添えて、婆さんが必ず拾う場所に置いた。決して捨てたわけではないよ。イノシシやオオカミに食われるといけないから、呉作がすぐ近くで見張っていた。そうしたら二日目の朝、思惑通りに婆さんが拾った。呉作は家まで付いて行き、爺さんの反応も見た。苦虫を三千匹噛み潰したような顔だったという。それでも婆さんが言い張って、赤ん坊は庄屋の家で育てられることになった。見届けた呉作は、それでも気になったのだろう、その後も三月に一度は様子を見に行っていたもんだ」

「呉作さんにお礼を言わなきゃ」

「まあ、いいってことよ。さつき海で、わたしの隣で体を洗っていたのが呉作だ」

桃太郎は、やつと事情が飲み込めてきた。お爺さんはどうして僕を鬼退治に出したのだろう。悪くは思いたくないけど意趣返しのもりだろうか。十月の最初の満月の夜、僕が村人を鬼と間違えて襲撃し、財宝を持ち帰れば満足だったのかな。そんなに簡単に行くと思っていたのだろうか。それとも、襲撃の戦闘で僕が斬り殺されれば、身元を知った母と村人は取り返しのつかないことをしたと嘆くだろう。狙いはそれかな？

どう考えても、お爺さんは良いことのために僕を送り出したわけではなさそうだ。一番簡単に考えれば、僕が鬼退治に行きたいと言ったので、先行きの予測などせず、どっちに転んでも損はしないと見切ってキビダンゴを作ったようにも思える。わからないことは、いくら考えてもわからないや。

話を聞き終わって、桃太郎は母の家に帰った。さつきまで近くにいた犬の姿が見えない。サルとキジにも出会わない。おおかたどこかでご馳走になっているんだろう。

桃太郎の憤慨

いくら武勇に優れていても、桃太郎はまだ十二歳。その後数日は母に甘えてずっと家にいた。もう刀も弓矢も槍も要らない。大八車など沈んでしまえ。母は十二年分桃太郎を甘やかし、毎日毎日ご馳走を作ってくれた。魚は旨く、雑穀が混じらない白いコメは天国の味だ。聞けば、鬼が島に引越して以来、村人は白いコメしか食べていないという。最初の二年は足軽村から運んできた米があったし、その後も金銀を少しずつカネに換えてコメを買っていたという。なんとも贅沢な話だが、元々自分たちの財産だったものを、どう使おうと自分たちの勝手、というわけだ。金銀財宝はまだ半分くらい残っているらしい。これが底を突く前に足軽村に帰ればいいのだが、和尚が言うには、庄屋もそろそろ歳だから、くたばったのを見届けてからでいいだろうとのこと。村人の意見も、ほぼその方向で固まっているらしい。

しかしやはり農民で、土に触っていないと生きた心地がしない人もいた。鬼が島には岩と砂しかない。砂地でも育つラッキョウとコンニャク芋を植えて、ごく少量の収穫がある。その他は、海の魚以外、何も採れない。暇を持て余すと、定石通り酒に走る者も出てきた。先頭を切ったのは和尚だ。しかし和尚は酔っ払っているだけではなかった。村人全員に読み書き算盤を教え始めたのだ。定期的に試験があり、合格しないと進級できず、落第すれば周囲から白い目で見られる。白い目は誰しもうやだから、酒はほどほどにして、みんな勉強するしかない。十二年経った今、まだ二年生でウロウロしている者がいる一方、すでに四書五経を諳んじ高級和算の解法を研究している者もいるという。母は特別に芝居を専攻し、演劇学では村一番になった。

鬼が島という名前が良かったのか、浜辺を通る旅人も、そう簡単には立ち寄らない。島を指差し、何かひそ

ひそ話しながら通り過ぎる。逃亡村民の隠れ集落としては大成功だ。ただ、去年の末、少々困る来客があった。大型の北前船で乗り付けた大坂商人だ。今橋の鴻池善右衛門という豪商の手代で、鬼が島という地名が気に入る、ここを霊場として売り出そうというのだ。恐山は陸奥の国の果てで旅行するには遠すぎる。ここを第二の恐山として整備すれば、京大坂はもとより駿河や薩摩からも巡礼がやって来る。住民は宿屋を経営したり鬼踊りを見せれば大金を稼げる、という趣旨だった。普通ならありがたい申し出だが、この特殊事情からすると迷惑千万、鴻池には忘れてほしかった。手代たち一行は笑顔で帰ってけれど、またいつ来るかわからない。それだけが心配事だという。

そうか、気楽に暮らしているようだが、聞けばいろいろとあるものだ。でも、桃源郡にいたときより、暮らしは遥かに良い。長い村の歴史の中で、こんな極楽の日々があってもいい。母はそう言った。

桃太郎個人でいえば、悩みの種は犬、サル、キジの三匹だ。毎日やってきては「金銀財宝」とせつつくのだ。たしかに三匹は実の親に再会したわけでもなし、特に良いことがあったわけでもなし、それぞれの目的のため、欲だけで付いて来たのだから、早いところ分け前をもらって帰りたいがっているのはわかる。でもなあ、この段になって財宝をかつぱらって逃げるなど、とてもその気になれない。といって、三匹に「あきらめろ」とも言えない。桃太郎は板挟み、針の筈に座った気分だ。たまに三匹が来ない日があると、桃太郎はほっとすると同時に、今日は夜中に来るのかなと思ひ、鳥の羽音にも犬の鳴声にも大きく怯えた。こりゃもう立派な強迫神経症。ももはとて心配したが、桃太郎は理由を話せないでいた。しかし二十日もすると、三匹はついに桃太郎の家にやって来なくなった。そればかりか、島の誰も三匹を見なくなった。やつぱり獣だな。もう財宝が手に入らないとわかって、早々に見切りを付けたのだろう。かわいそうなことをしたけれど、僕は何もしてやれない。桃太郎は複雑な気持ちだった。

そんな折り、今夜二ヶ月ぶりに財宝を取り出すという知らせが回ってきた。コメはまだ半年分の蓄えがあるが、材木が不足したので金銀を少し力ネに換える。そのために秘密の隠し場所を開くという。村人は『ご開帳』と呼んでいた。隠し場所を開ける際、不正がないことを示すために、希望する村人は誰でも立ち会える規則だ。

「桃太郎、行ってみるかい？」母が訊き、桃太郎はもちろん行くと答えた。

夕暮れどき、松明や提灯を持った村人が鬼祭りを開いた広場に続々と集まった。あちこちで挨拶を交わす言葉が聞こえる。そうか、これは一種の娯楽なんだ。狭い島でも、日常ではなかなか出会えない人もいる。ご開帳は社交の場でもあるのだろう。

海岸沿いのごつごつした岩場を抜け、松林を横切ったところに隠し場所があった。自然の横穴のように見えるその奥に、枯葉と砂で覆われた小さな扉がある。今月の月番の呉作が扉を開けた。中には大判小判、金銀延べ棒があるはずなのだが、

「あつ、あつ」呉作が言葉にならない叫びを上げ、扉の中を指差すと、そこには何も無かった。村人は扉に押し寄せ、交互に中を覗いた。呉作のように意味不明に叫ぶもの、沈黙してしまうもの、「どこに行った」とあたりを探すもの、とにかく大騒ぎになった。横穴の前の土をよく見ると、つい最近大八車が止まった跡がある。盗賊はここに大八車を横付けし、財宝を積んで持ち去ったのだ。

呉作が「こんな紙だけあった」と村人に叫んだ。小さな紙に、なにやら文字が書いてある。「ええと、桃太郎さんへ、」呉作が最初だけ読み、桃太郎に紙を渡した。なんで僕宛なの？ここには知り合いは少ないはず。差し出された松明の明かりで、桃太郎は紙を読んだ。

「桃太郎さんへ、みじかいあいだけどありがと。これでいればおつくるよ。かいぬしみつけたらてがみかくね。犬より。おれわぼすになるから、いつでもあそびにこい。サルより。近隣最新詳細地図近日堂々完成、特価格

安先行販売予約受付開始、買ってね。キジです」

村人はどよめいた。あの三匹が盗んだのだ。やつらは島中をくまなく探したに違いない。サルが目星を着け、犬が嗅ぎ当てたのか。いや、キジが上空から踏み分け道を見つけたんだろう。方法はともあれ、もう財宝はひとかけらも残っていない。村人全員の命に関わる事態になった。

多くの村人が嘆き、悲しみ、怒り狂った。少数ながら桃太郎を恨めしそうに見る者もいた。

その桃太郎は、買った恨みに耐えかねて身を小さくしているかとみれば、決してそうではなかった。やはり烈火のごとく怒っている。憤怒の形相すさまじく、大八車が去って行ったであろう陸地の方角を睨み、呟いていた。

「あいつらめ、三匹だけでも大八車を動かせるじゃないか。ずーっと僕にだけ引つ張らせて。くそっ」

足軽村再生計画

もう材木どころではない。早急に次の行動、つまり村としての身に振り方を決めなければ。あと半年でコメが切れる。そうなれば飢え死にだ。今までの「何でもいくらでもある」天国の生活は突如として終わり、いきなり現実に直面することになった。鴻池の提案を受け入れて、島全体を娯楽霊場にするのも一手。だがそれでは負け犬の道を選ぶことにならないか。わたしらは百姓だ。踊りで生計を立てるなど、屈辱以外の何物でもない。村のまとめ役は悩んでいた。和尚にも相談に行ったが、「おおそうか、痛快、痛快」と大笑いするだけで話にならない。「酔いが醒めたらちよつと来てほしい」と言い残して帰ってきた。

さて、どうしたものか。村人には今後、今のように遊んで暮らす生活はあり得ない。働くことは誰も嫌がらないだろう。根っからの農民だから、田畑と農具を見せれば、ダメだと言っても耕しだすに違いない。それはいいのだ。問題は食えるかどうかだ。仮に足軽村に帰ったとしても、あの庄屋が生きている限り、昔と同じ惨めな生活が待っているだけ。庄屋を殺す？これはいけない。和尚が許さないだろうし、発覚したら何人打ち首になることか。

それでは足軽村はあきらめて、どこか別の土地に行こうか。開墾から始めたら、当初の数年は地獄になるだろう。今の生活から地獄の生活への変化に、どれだけの村人が付いて来られるか、あまりに危険すぎる。それなら悲惨を覚悟の上で足軽村に帰るのか。それもなあ、

「やあカシラ、泥酔からは醒めたぞ」和尚がやって来た。一升徳利を掲げ、大きなイカゲソをかじっている。「最近、イカが大きくなったと思わんか。これはスルメイカかのう。ダイオウイカの子どもかもしれん。味は同じだ」

「いらつしやいませ。わざわざお運びいただいて。でも、カシラはやめてくださいよ。せめて先達とかなんとか」「いやあ、鬼の頭領だろ。カシラにちがいはない。頼りないカシラだかな。それで、また村をどうするか雑念入りで思い惑っておったのだろう。すでに決まっておることで悩むなど、仏からは遙かに遠い凡人の愚行だ」「そうは仰いますが、何ひとつとしてすでに決まっておるやしませんよ。何が決まっているんですか」

「帰るんじや、足軽村に」

「そう簡単には、いきません」

「簡単なことも複雑に考えれば、いくらでも複雑になる。わからんか」

「いいえ、この問題は最初から複雑でして。また以前の生活が待っているかと思うと」

「誰がそんなことを言った。たしかに帰る場所は足軽村だが、十二年前の足軽村ではない。これからの足軽村じや。十二年といえば干支が一回りもする長い年月。乞食の子どもも十二になる。おおそうだ、桃太郎も十二じやな」

「十二年経つても庄屋は生きています。因業さは今も変わらないでしょう。昔と同じですよ」

「これだから衆生は救えん。いいか、釈迦如来はご自分で発起なされ、ご自分で悟りを開かれた。誰も助けてはくれなかつた。かのイエスキリストも、ユダヤ旧勢力の迫害から逃れつつ、荒野でたった一人、自分なりの真実にたどり着いた。やはり助けなどなかつたぞ。さらに神武天皇は、」

「そりやどうも。お釈迦さんやキリストと比べられてもなあ」

「だからいかん！ 第二の釈迦、二人目のキリストになってやろうくらい在意気込みがなければ、男子たるもの何事も成就できん。覚悟次第で、誰でも、なんにでもなれるのだ」

「和尚さん、まだ酔つてるでしょ」

「少しな」

それでも和尚は多くの妙案を教えてください。結論から言えば、今の庄屋を無力化して新たな庄屋を置き、できることなら代官とも手を切つて、年貢も納めなくていいようにする、という破天荒なものだ。それを、血を一滴も見ずに実現するという。和尚が言うには、あと五升も飲めばもつと良い案が出るかもしれない、のとだが、聞いた話だけでも充分に良さそうだった。

「さてみなさん、集まってもらつたのは他でもない、財宝がなくなつた件だ」

緊急に召集した村人全員の前で、カシラは前置きもなく話し始めた。

「怒つたり困つたりしているだろう。できれば取り戻したいとも思っているだろう。犯人はわかっている。行き先もほぼわかっているから追手をかけて探し出すのも方法だ。でも、それでもし次の騒ぎになったら、わたしらの過去が暴かれてしまうかもしれない。そうなれば財宝を取り戻したところで役に立たない。世の中には、わたしらが庄屋から盗んだと考える人もいるだろうから、こつちが罪人になってしまふ」

「そうつと隠密行動でやれば大丈夫だろう。盗まれたままじゃ腹の虫が収まらん」若い男が言った。

「腹の虫が収まらないのはみんな同じだろうよ。だが、腹の虫を収めるだけで動いて、もつと深手を負つたら、ただ損をするだけじや。ここはひとつカシラの言うことを聞いてみるべ」老婆も真剣だ。

「カシラではない。わたしは先達だ。まあ呼び名はいいか。桃太郎さんの話では、犬は京の都に、サルは岩山に、キジは向こう岸の海岸沿いにいるということだ。みんなの意見が多ければ、捜索隊を三組作つて財宝を取り戻すことにするが、ただ問題もある。コメがあと半年分しかないのだ。明日、三匹のうち一匹でも捕まえて財宝を取り戻せればいいが、時間がかかると、その前に飢え死にしてしまう。一匹でも捕まればいいが、いつ捕ま

るかは運任せのようなもの。わたしとしては村民の命を運に任せるわけには行かない」

「十二年前、死ぬ気で村から逃げたんだから、とうの昔から覚悟はできてらあ。死んじまうのも運命だ。恨みっこなしだぜ」村一番の酔っ払いが言った。

「そう言ってもらえればありがたい。だが生き残る努力もしたいんだ。そこで別の道があるのだが」と、カシラは広場を見渡し、この際、頼みの綱の和尚を探した。和尚は、離れた場所に興味なさそうに寝転がって、干し魚を齧っていた。

「それは、村に帰ることだ」とカシラが言った。

村人は一斉にしゃべり出した。帰ったら捕まるだろう、元の本阿弥ではないか、これまでの苦労はなんだっただ、また貧乏になるね、絶対に帰らない、ここで死んでやる、等々。

「ちょっと聞いてくれ」カシラが声を限りに叫んだ。「帰るといつても、昔の生活に戻るのではない。そんなことなら『全貞ここで首をくくりましょう』と提案するほうがましだ。わたしは村に帰って、村をもう一度作り直したい。庄屋などいない、年貢も払わなくていい、そんな村にしたい」

「ちょっと無理だべ。ぶっ殺してもせん限り、ああいう米食虫は湧いて出る。人殺しはちょっとなあ」

「いや、人殺しはしない。少々小突く程度はするかもしれないが、血を見ることはないし約束しよう。もちろん溺死体もなしだ。この計画の絵図面は和尚が描いた。今はネコみたいに知らん顔をしているが、原作は和尚だ。詳しく聞きたいかい？」

「聞かせろ」の声が広場に響いた。

「わかった。話を漏らすような不埒な輩はいないと思う。絶対秘密だよ」カシラが言うと全員が頷いた。

「まず、コメが半年分しかないから、実行するなら急を要する。遅れたら餓死者が出ると思ってくれ。幸いこ

ちらには、桃太郎さんという飛んで火に入る夏の虫、いや、一騎当千の助太刀がいる。庄屋は、財宝を取り返そうと桃太郎さんを送り込んで来た。だからこっちも桃太郎さんを持ち駒にするんだ」

村人は全貞前のめりになって、一言も聞き漏らすまいとカシラの話に聞き入った。

夜も更けたころ、寄り合いは終わった。カシラは半紙と筆を取り寄せ、村で一番文才がある孔孟子という子どもを呼んだ。なんと桃太郎と同じ年の少女だった。少女は笑いながら三通の書類を書いた。なるべく難しい字を使って、なるべく難しい言い回しで。

足輕村の鬼退治

風もなく穏やかな冬晴れの午後、桃太郎はなつかしい家の前にいた。やっと帰ってきた安心感も少しはあった。二ヶ月留守にしただけなのに、門は古び、母屋も苔むしたように見えた。多分、前からこんな風だったんだろう。僕の目が新しいものを見たからだ。

そろそろ支度も良さそうなので、桃太郎は門をくぐって大声で挨拶した。

「お爺さん、お婆さん、桃太郎がただ今帰りました」

母屋からお婆さんが駆け出してきた。

「おお、桃太郎や、よく無事で帰ったね。心配していたよ」

次にお爺さんが驚いたように縁台に現れた。

「桃太郎、生きて帰ったか。でかしたぞ。大八車は門の外か？」

「どうもご心配をお掛けしました。桃太郎はこの通り元気です。お爺さん、お婆さんともお元気なご様子。安心いたしました」

「ああ、元氣だとも、お前の帰りを一日千秋の思いで待っておった。無事ということは、鬼退治に成功したんだな。それで財宝は？」 爺さんはしきりに門の外を気にしている。大八車があるはずなのだ。

「それでは立ち話もなんですから、縁台に腰掛けて、と」 桃太郎は爺さんの気持ちを逆なでするように、ゆっくりと縁側に座り、「作っていただいたキビダンゴ、とても役に立ちました。お陰で手下が三人できました。いや、正確には手下が三人ではなく、三匹と言っべきでしょう。それがまた楽しいやつらで」

「そんなことはどうでもよい。こら桃太郎、わしの金銀財宝は取り返したんだろうな」 爺さんは怒り始めた。

「あつ、あれね。鬼が島にありました。僕は直接は見えていないのですが、たしかにありました。でも今はもうありません。ですから持って帰ってはいませんよ。それよりも、さすがは鬼が島ですね。魚が旨いのなの。獲れたての鰻を刺身にして、一度お爺さんに食べてもらいたいくらいで」

「鰻の刺身はどうでもよい。金銀財宝、大判小判はどうなっているのだ」 ついに爺さんは縁側に立ち上がって怒鳴った。

「まあまあ、そんなに興奮することはありません。金銀財宝より、もっともっと大切なものを持って帰ってきましたから。さあ、みなさん、お顔を見せてください」

と、桃太郎が言った途端、庄屋の庭を取り囲むように待っていた村人全員が立ち上がった。

「おおつ、なんだお前は。鬼が島で食い詰めて、詫びを入れに帰ってきたのか。そう簡単には許さんぞ」 カシラがゆっくり進み出て言った。

「長らく留守にして悪かったですね。詫びはそれだけだ。許してもらおうなんぞ、これっぽっちも思っていない。許してもらうのはあんたのほうだろう。こっちも簡単には許さんがね」

「黙れ黙れ、どん百姓のくせに生意気な。それ以上庄屋を愚弄すると手は見せんぞ」

「手を見せんとは刀を抜くっていう意味ですね。あいにくどん百姓のわたしらは、人切包丁の扱いに不慣れなもので、お手を合わせるなら桃太郎さんがお引き受けするはずですよ。それとも我が子とは斬り合えませんか？」

「こらつ、言うに事欠いて桃太郎がわしの子だど？ お前ら血迷ったか。育ての親ではあるが実の子ではない。そのくらい知っておろつ」

「そうですかねえ。では舞姫に出てきてもらいますよ」

村人の人垣の中から、ももが現れた。この寒いのに色っぽい浴衣一枚、左腕には巻いた蓆を抱え、軽く頬被りした手ぬぐいの端を唇に挟んでいる。これには桃太郎も驚いた。かあさん、なんていう恰好を。

庄屋の前に進み出ると唇から手ぬぐいを離し、手ぬぐいははらりと地面に落ちた。

「これはこれは庄屋さま、お久しゅうございます。ももにございます」と軽く頭を下げた。

「なんだこの夜鷹は。まだ昼間なのに出てきおつて馴れ馴れしく口を利く」

「庄屋さまと馴れるの親しむのは、わたくしの願いではございませなんだ。よもやお忘れではございますまい、春の午後、庄屋さまの錆びた古槍、たった三突きでできたはこの子、桃太郎にございます」

「戯けたことを。新手のゆすりか、この騙り者めが」

「いえいえ、何もいただきとうはございません。夜鷹なら十六文が世の相場、それに一分銀とは多分なご祝儀、ただかぬのはご無礼とは存知ながら、あまりの高に我を忘れ、思わず投げ返しておりました。あときいただいた一分で、ももは充分でございます」

赤くなったり青くなったりしている庄屋の代わりに婆さんが口を開いた。

「桃太郎や、このご婦人はそなたの母か？」

「いかにも母者と存じます。なにか故障がございましょうか」

「お前はまだ幼い。知らぬ女が母だと言えば、恋しさのあまり信じてしまふも致し方ないが」

「お婆さん、僕もそれほどガキではありません。桃に見える竹籠、僕の名前を書いた紙札、母さんは僕が言う前に話してくれました。捨て子拾い子の全容を見ていた呉作さんからも詳しく話を聞きました。それより母子には通じ合うものがあります。この人が母でないなら、この世に母はおりませぬ」桃太郎は平伏した。

「わかりました。ところでお爺さん。本当に憶えはないのかえ？」お婆さんは爺さんに矛先を向けた。

「憶えといつても思い当たらん。このわしが、どん百姓の娘などと」

「やいこらジジイ、聞こえねえよ！と居直りたいのを我慢して、男衆の浮気は当然のこと。以前女中を懐妊させること数度に渡り、またかというのが素直な感想。たとえ妾、浮気でも、子ができたのは目出度いことではないかねえ」婆さんは爺さんを見やった。爺さんは、婆さんと村人を交互に睨みつけている。

このまま放っておけば交渉の主題から離れかねないと感じたカシラが口を挟んだ。

「あのおう、そちらでモメるのは、後でゆるゆるやっていただくとして、それでは庄屋さん、桃太郎はあなたの息子だね？」

「それがそんなに大事なことか。たった一度で孕むとは、よほど多産な家系とみえる。ああ、わしが父親だよ。だから育てたくなかったんだ。いずれ運が尽きれば白日の下に晒される。そんな気がしていたからな」

第一段階の勝利に、聞いていた村人は雄叫びを上げた。やったやった、ついに庄屋の首根っこを押さえたぞ。ももがカシラになにか耳打ちした。

「えっと、ももさんが言い足りないことがあると言っています。庄屋さん、いいですね？」

「勝手にしろ」

もう一度ももが出てくると大向こうから声がかかった。「ももっちゃん！」「たっぷり」等々。

「されば、庄屋さま、恨み辛みは申しますまい。返せ戻せも言いませぬ。ただ、手籠めにされた女の行方を、たっ一段聞いてください。あの日を境にこのももは、人から売女と蔑まれ、歩く細道獣道、今夜はあちらの橋の下、明日はこちらの軒の陰、三千世界の裏から裏へ、流れ漂う彼岸花。赤く咲いたがそれゆえに、殿御惑わす身のさだめ、己の不幸に他はなく、恨むその先道は果て、再び帰る奈落の底。うごめく鬼に苛まれ、この暗闇はいつまで続く、昇る朝日を夢に見て、たとえ悪夢も夢のうち、冷たく凍る世の果てで、儂き願いに取り縋る。

いつかは蓮華の露となり、日の輝きで昇天すべく、それだけ祈って生きて来ましたのさ。そうですよ、私が鬼です」

ももはぱつと身をひるがえし、懐に吞んでいた短刀で庄屋を刺そうとした。桃太郎はかねてからの打ち合わせ通り、ももに飛び付き、寸前で短刀を叩き落とした。

「母さん、殺したがつているのは母さんだけじゃない。たとえ人の皮を被った獣でも、殺せば殺人。ここは僕のためにこらえておくれ」と、ももを抱きかかえて下手にはける。

庄屋は腰を抜かして驚いている。計算通りだ。そこでカシラが言った。

「庄屋さん、月のない夜は気を付けることだね。わたしがいれば守ってやれるが、まさかいつしよに暮らすわけにも行かないだろう。ところでちよつと訊くが、わたしがいない間、代官所から人は来なかったのか？ 無人の村を見て、不思議に思わなかったのかな？」

「それは来たさ。見回りも年貢の取り立てもあるから。年貢は立て替えておいた。いつか返せよ」

「どうもご親切に。で、無人の村については？」

「仕方がない。村人全員でJAの研修旅行で温泉に行っていることにした」

「毎年？ それで役人は納得したのかね」

「するわけがない。わしの手持ちの骨董から、毎年ひとつずつ役人に渡したのさ。とんだ災難だ」

「では足軽村は、まだ人が住んでいることになっているんだね」

「そうでもしなければ、わしの立場がないだろう」

「ごもっとも。けど安心していいですよ。来年から、いや、今日からは年貢も払わなくていいようになりますから。さて、この書類に署名押印してください。押印の代わりに花押でも結構」

「なつ、なんだねこれは」

「読んでいただければわかります」

「えつとお、全然わからん。どんな意味のことが書いてあるんだ」

「おや、いつから文盲になりなすつた。この程度の文章なら、我が村の小学生でも書きますが」

「ぐずぐず言わずに読め」

「はいはい、つまりですね、足軽村の廃村届で代官所に出します。お役人がこれまでの村の荒れようを見ているなら、ほとんどお調べ無しで受け付けられるでしょう」

「廃村だと？ わしは許さん」

「だめですか、残念だな。じゃ、例の投げ文、今すぐ代官所に放り投げてきて」と、カシラは人垣に向かって叫び、即座に「はいよ」という威勢の良い声が返ってきた。

「待て、待てよ」あわてたのは庄屋だ。「投げ文ってなんだ。何を言いつけるのだ」

「事実をです。ここ十二年間、足軽村は村民全員が離村して無人だった。これからも無人だろう。庄屋は取り繕っているが、村人が離村した理由は庄屋の悪度すぎる搾取だ。という意味のことです。わたしらは別に、もう足軽村に帰らなくてもいい。農業ができるなら、どこにでも住めますから。投げ文、いいですか？」

「それはだめだ。十二年間もお上を騙っていたとなれば遠島では済まない。殺されてしまう」

「気の毒ですが同情はできません」カシラは妙に冷静に言った。

「わかったよ。廃村届けに署名押印しよう」

人垣の村人は、また歓喜の声を上げた。

「はい、ありがとうございます。続いて、これはご納得いただけるはずですが、JAの解散覚書。いやあ、こ

の組合には騙されました。まさか、農民とは反対側の組合だったなんて。覚書に署名押印していただければ、組合は正式に解散します。さあ、どうぞ」

庄屋は渋々と署名押印した。今度の歓喜の声は、それほど大きくはなかった。

「では最後に、ねえ庄屋さん。村も組合もなくなったことだし、それにお歳でもあるし、どうです、この辺で家督を譲られては。まあ譲るといってもカネになるのは庄屋の株くらいのものでしょうか。毎年、ちゃんとお払いますよ。今後は一反歩あたり一文お支払います。もちろん年額で。庄屋さんご一家が、誰が庄屋になるにしても、多少の足しにはなるでしょう。足りない分は自分で働いてもらうことにします。まあ、わたし個人の意見では、庶子とはいえ立派なご長男がいらっしゃるのです、その方に継いでいただくのが一番かと」

「なに、桃太郎に家督を渡せと。どこをどう押せば、そんなちよぼいちな話が出てくるんだ」

「あつ、嫌ならいいんです。他人様の相続に、どん百姓のわたしなどが口出しするなど畏れ多い。それじゃ、桃太郎さん、ももさんと旅に出る支度をしてください」

「家督をやらなから不貞腐れて出て行くのか」

「違いますよ。ただの農民として生きるには、あの二人は少々芝居っ気が強すぎるんです。桃太郎さんから聞いた話だと、家督を譲ってもらえば広い家が入って、そこに舞台を作って田舎芝居のひとつもできるけれど、それがダメなら母さんと二人、京の都で辻芝居をしたい。題材は今回の鬼が島騒動記がいいだろうって」

「さて、また待て。このみっともない一連の話を芝居にするのか。当家の恥を晒すのか。絶対に許さん、と言ってもやるだろうな。まあ、実名を使わなければいいとするか」

「最近、京の都では実名小説や実名芝居が流行っていますね。その風潮に乗り遅れるような二人ではないでしょう」カシラのほうが芝居がうまいかもしれない。

これまでしばらく黙って聞いていた婆さんが、弱々しく口を開いた。

「お爺さん、もうおよしなさい、完敗ですよ。潔く兜を脱ぎましょう。ツケが回った証です。この家に嫁いで以来、なるべく臭いものには蓋をしてきました。あなたの、人を人とも思わない所業に耳をふさぎ、目をつむり、人の恨みに殺されまいと、心を鬼に耐えてきました。もちろん、これはただでは済まされまい。いつかしつぺ返しが来るのでは、と怖れてもおりましたが、それが今日。

これまでの歲月、せめてもの救いは桃太郎。お爺さんを反面教師にして、人の心、人の誠を教えたつもりでおります。桃太郎や、私の育て方は間違っていないか？ せひそれだけは答えておくれ」婆さんは桃太郎を見つめた。

「はい、感謝しております。こんなに立派に育てていただいて、正しいものと間違ったものを見分ける力もあると思います」

お婆さんは黙って頷いた。これで爺さんは家督を譲るしかなかった。

大団円

甲↓

桃太郎と母はその日のうちに屋敷の母屋に引越し、爺さんと婆さんは離れに移った。村人たちは元の家に帰り、荒れ果てた造作の修理を始めた。さすがに十二年も住んでいないと屋根は落ち、壁は崩れ、井戸は濁って使い物にならない。桃太郎と母は一日中おむすびを作って村人たちに炊き出しをした。足軽村に活気が戻った。

鬼が島から持って来たイワシの丸干しをかじりながら桃太郎が言った。

「かあさん、これで良かったのでしょうか」

「さあ、私にはわかりませぬ。良いも悪いも、すべては流れる水のように。逆らったら溺れ、流されれば己を失います」

「うくん、かあさんの言うことは和尚より難しい」

「そうでしょうか。思ったままを口にしたまで。桃太郎や、今の立ち位置が正しいを思うなら動かぬことです」
やっぱり難しい。和尚に訊きに行こうか。

そんな桃太郎が試される事態になった。元庄屋夫婦に屋敷から出て行ってもらいたい、という声が大きくなったのだ。屋敷に爺さんがいつまでもいると村人は解放された気になれないし、ももさんも良い気持ちはないだろうから、どこかに引越すべきだ、というのだ。桃太郎からすれば、過去の経緯がなければ実父と住むのは当然のこと。今ここで爺さん婆さんを放り出して、芋でも作って勝手に暮らせとは、心情として言いにくい。

さあ、どうしたものだろう。悩んでいるところへカシラが話を持って来た。

「あの爺さんはたしかに鬼だった。まだ鬼かもしれないが、だいぶ無力化された鬼だ。あるいは鬼ではなくなっているかもしれない。だが、それは誰にわかる？ 村人の多くは、まだ鬼だと思っているんだよ。爺さんをこの屋敷に置いておく積極的な理由はみつからない。だから出て行ってもらうしかない」

桃太郎は困った。そして思っていること言った。

「でも、追い出したら飢え死にしませんか？ みなさん、死んでもいいと思っているのだろうけど、僕はお婆さんに助けてもらった身なんです」

「いやいや、死んでいいとは誰も思っていないよ。村人はそんなに鬼ではない。そこで、昨夜の寄り合いで、ふたつの勤め先、といつてはなんだが、老人にもできる仕事を探し出した。どちらもカネは溜まらんが飢えることはないはずだ。いっしょに離れに行つて提案してみないか？」

桃太郎はカシラといっしょに離れをたずねた。爺さんは空を眺め、婆さんは針仕事をしている。

「ああ、桃太郎、よく来たね。またお前の着物を縫っているよ」そう言つてお婆さんは布を広げた。今度は桃色の生地に白い桃の花のアププリケが所狭しと付いていた。「ね、きれいだろ。着たらとってもかわいいよ」

お婆さんに悪気など全然ないのはわかる。でも、僕があれば着るの？

「わあ、嬉しいな。早く縫い上げてね」と言うしか仕方なかった。

「ところでご夫妻」とカシラが話を始めた。

強制はできないが屋敷から出て自活してほしいこと。今の世の中で老人が仕事を見つけてるのは無理に近いので、こちらで二通り用意した。ひとつは、寺の隣にある鬼面神社に、もう何十年も神官がいないので、とりあえず神官のようなものになるのはどうだろう。祝詞などあげられなくてもいい。かしこみかしこみだけ聞こえ

ればいいんだ。それからもうひとつは、鬼が島に渡って、これから鴻池が作る娯楽施設の番人になること。鴻池資本だから食いはぐれる心配はない。この前までわたしが住んでいた家もあるし井戸もある。舟も何艘かつないだままだ。着いたその日から生活できる。このどちらかを選んでほしい。

お爺さんとお婆さんは、少しの間二人で相談すると言った。

夜になって、お婆さんが桃太郎を訪ねてきた。

「名残惜しいが桃太郎、鬼が島に行くことに決めました。この村に愛着はあるものの、やはりみなさんの目障りでしょう。それに、お爺さんはまだ鬼かもしれない。でも、鴻池という大鬼の下で働けば爺さんは小鬼、それほど目立ちはしませんまい。出発は明日です。お見送りはご無用に」それだけ言って帰ってしまった。

その夜、桃太郎は眠れなかった。ついには起き出して台所でうろろし始めた。

朝になり、門のほうから人声が聞こえた、桃太郎が急いで行くと、お爺さんとお婆さんが出て行くところだ。

「お爺さん、お婆さん」桃太郎は自然に叫んでいた。

「おお、やっぱり来てくれたのか。ありがとうよ」お婆さんは風呂敷をひとつ開き、縫い上がった着物を出した。

「着てみておくれ」と言われたので、桃太郎は袖を通したが、うわあ、これはすごい。芝居の衣装には使えるかも。それでも「すぐくきれいだね。大切にするよ」とお婆さんに抱きついた。

別れの挨拶の後、二人が門を出ようとしたとき、桃太郎は小さな包みを差し出した。

「キビダンゴ、百本人つてます。僕が作りました。何かの役に立ててください」

桃太郎はいつまでも手を振り、見送っていましたとき。

大団円

桃太郎と母はその日のうちに屋敷の母屋に引っ越し、爺さんと婆さんは離れに移った。村人たちは元の家に帰り、荒れ果てた造作の修理を始めた。さすがに十二年も住んでいないと屋根は落ち、壁は崩れ、井戸は濁って使い物にならない。桃太郎と母は一日中おむすびを作って村人たちに炊き出しをした。足軽村に活気が戻った。

鬼が島から持って来たイワシの丸干しをかじりながら桃太郎が言った。

「かあさん、これで良かったのでしょうか」

「雲流れ、川流れ、時流るとも、人の怨念消ゆることなし。桃太郎、村人が鬼を許すと思うかえ？ いまだ安堵の時は来ておらぬ。鬼ある限り人の心に鬼ぞ住む。鬼祭りにも鬼は月へは帰りますまい」

「では、どうすれば良いのでしょうか」

「さあ、それは」

お爺さんとお婆さんを離れに移して、これで落着くと思っていた桃太郎は、そんなことでは済まない根深さを知った。今では自分が庄屋だ。村人の安心立命を第一に考えなければならぬ。すべての不安要素は排除しなければならぬ。

イワシの丸干しを持って、桃太郎は和尚を訪ねた。和尚はすぐに火を焚いて丸干しを焼き、食べながら答えた。「報いというものがある。善行には良い結果、悪行にはそれなりの結末。これらは神や仏がくれるものではない。すべては自らの行ないが反映されるだけじゃ。誰も変えられん。わかるかな？」

「はい、なんとなく」

「では、そのようにしたらいい」

「どのように？」

「お前はアホか。今度の夏は寺に修行に來い。雑巾がけから教えてやるわ」

ますますわからなくなった桃太郎は、帰り道で出会った呉作に相談した。

「そうだなあ、本音を言えば消えてほしいよ。この間はおれたちの作戦勝ちで庄屋を離れに押し込めたが、あいつの本性が直ってるはずがない。いつまた汚い手を使うか、心の底じゃあみんな不安に思ってるだろう」

「そうなんだ、まあ、そうだよね。でも、消えるって殺すこと？」

「滅相もない。この村の誰も人殺しなどできないよ。できるなら楽だが」

「じゃあ、どこか遠くに追放するとか」

「それもいいがね、帰って來ない保証はあるか？」

「ないなあ」

家に帰っても離れが気になる。よもや再起の相談をしているのではないか。代官を騙して村民謀反の討伐を依頼する文を書いているのではないか。疑い出せばきりはない。桃太郎は何日か、そんな不安な気持ちに耐えていた。

「桃太郎、お前最近目つきが悪い。自分の顔を水に映して見てごじゃれ」と、ももが言った。

たしかに顔つきが険しくなっている。悪相ともいえるほどだ。原因はわかっている。あまりに疑いすぎたのだ。なんとかしないとこの形相が固まってしまう。そして決意した。鬼になるときは鬼になるしかない。それ

は今だ。

カシラに頼んで、裏山の山腹に大きな横穴を掘ってもらい、入口には頑丈な格子を嵌め、扉には南蛮渡來の錠前を付けた。穴の中には畳を敷いてなるべく居心地を良くし、雨風が吹き込まないように、入口には屋根と風除けも設けた。

「お爺さん、お婆さん、申し訳ないけれど引越していただきます。新居は用意いたしました。畳は新品、生活用具も揃っています」

様子見を兼ねて、村人が当番で飯を運ぶ。これで不安はなくなるはずだ。

村は一段と明るくなったように見えた。もう誰一人、元の庄屋の話をする者はいなくなった。

ただ、風の強く吹く晩などに、遠くの裏山から獣が唸るような声が聞こえることもあった。そんなとき、ももは桃太郎によく言ったものだ。

「ああ、また鬼が吠えている」

鬼の吠え声を聞くと、桃太郎はなぜか無性に頭が痒くなるのだ。ボリボリ搔いていると、そのうちに指先に小さな硬いものが当たるようになった。両目の上三寸ばかりの場所だ。小さく硬いものはだんだん伸びてきて、ついにはツノだとわかったとき。

ここで終わっても可

丙↓